



## 第2回

# 人と自然の共生国際フォーラム

The 2nd International Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings

「自然の叡智を再考する」  
～森林から考える人と自然の共生～  
“Nature's Wisdom” Revisioning from the Forest,  
the Harmonious Co-existence of Nature and Human Beings

## 報告書 (要約版)



**日時：2008年11月15日(土)・16日(日)**

会場：1日目 愛知県立大学 講堂(愛知県愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間1522-3)  
2日目 海上の森(瀬戸市海上町他)始め 県内のフィールド

主催／人と自然の共生国際フォーラム実行委員会

(愛知県・瀬戸市・国際連合地域開発センター・愛知県国際交流協会・中日新聞社・名古屋大学・愛知県立大学・大学コンソーシアムせと・海上の森の会・NPO法人の木)

後援／総務省、環境省、経済産業省、農林水産省、地球産業文化研究所、中部経済連合会、名古屋商工会議所、国際協力機構(JICA)中部、東京大学愛知演習林  
愛知県森林協会、愛知県緑化推進委員会、愛知県森林組合連合会、愛知県農林公社、愛知県自然観察指導員連絡協議会、森林インストラクター会“愛”  
あいち自然環境団体、施設連絡協議会(あいち自然ネット)

# 第2回人と自然の共生国際フォーラム 開催報告

2008年11月15、16日に、愛知県立大学(長久手町大字熊張)で「第2回人と自然の共生国際フォーラム」が、県内外からの一般参加者を始め、自然環境の活動団体・施設、国・都道府県などの行政機関、CSR活動に取り組む企業などからの出席も含めて、総勢約500名の参加により開催されました。

今回のフォーラムは、「自然の叡智を再考する ～森林から考える人と自然の共生」をテーマに、世界の森林の現状に目を向けるとともに、「森林」が地球環境や私たちの暮らしにどのように関わっているかを参加者と一緒に考えることをねらいとし、様々なプログラムが実施されました。

テーマ：自然の叡智を再考する ～森林から考える人と自然の共生～

日時：平成20年11月15日(土)～16日(日)

場所：1日目 愛知県立大学 講堂(愛知県長久手町大字熊張字茨ヶ廻間1522-3)

2日目 海上の森(瀬戸市海上町他)始め 県内のフィールド

## プログラム

11/15(土)

開会式 ————— 10:00～10:30

基調講演 ————— 10:30～12:00

身近な森の魅力と魔力

ケビン・ショート

ポスターセッション ————— 12:30～13:15

パネルディスカッション ————— 13:30～16:45

森林から考える人と自然の共生

コーディネーター 川井秀一

パネリスト 天野正博

川勝平太

蔵治光一郎

小澤紀美子

フォーラム宣言・閉会式 ————— 16:45～17:00

交流会 ————— 17:30～19:30

11/16(日)

フィールドワーク

プログラム① ————— 10:20～15:00

海上の森 里山食文化体験と森の散策

プログラム②

県内森林・林業活動現地見学

尾張地域コース ————— 10:20～16:00

三河地域コース ————— 10:20～17:00



開会のことば

松下 栄夫  
(愛知県農林基盤  
担当局長)



主催者あいさつ

稲垣 隆司  
(愛知県副知事)



マリ クリスティース  
(あいち海上の森センター  
名誉センター長)



来賓祝辞

栗田 宏  
(愛知県議会議長)



小林 五十六  
(中部森林管理局  
名古屋事務所長)



# 身近な森の魅力と魔力



講師 ケビン・ショート (Kevin Short)  
東京情報大学環境情報学科 教授  
里山ナチュラリスト

1949年ニューヨーク生まれ。  
日本の田舎の里山自然に惹かれ、1987年より千葉県印西市に在住。1991年にスタンフォード大学の文化人類学生態学専攻で博士号を取得し、現在は東京情報大学環境情報学科の教授を務める。その傍ら、ナチュラリストとして新聞、雑誌への寄稿や講演活動を行う。主な著書は「ケビンの里山自然観察記」「ケビンの観察記：海辺の仲間たち」など。

## ■1,300年経った今も、原生林が残る場所

初めて愛知県の自然を見たのは10年ほど前です。ちょうど海上の森を使った万博が計画されていた頃で、日本中の自然愛好家たちが「森をつぶすな」と声をあげていました。その後、愛知県は計画を変更して海上の森を残し、日本の里山保全運動の中心地になってきました。

僕は生まれも育ちもニューヨークですが、ご先祖様はイギリスとアイルランド辺りからアメリカに渡ってきました。ケビンという名は、7世紀にアイルランドへキリスト教が伝わった時の初代キリスト教の神父、聖ケビンにちなんだものです。グレンダロホには聖ケビンの修道院が今もあり、その裏には原生林に近い森が広がっています。この森は聖ケビンにとって大切な修行の場で、一つのいわれがあります。聖ケビンは、「この森を壊す人があるなら、死の世界から戻ってきて呪ってやる」と言い残して死んだとされ、彼が祈りを捧げていた場所だけ、1,300年経った今も見事にその原生林が残っているのです。

森や自然にまつわるそういった物語や人々の心にあるものなどをふまえて、ぜひ皆様と自然について一緒に考えたいと思います。

## ■環境教育のポイントは、子供たちを森の中に入れること

中学生になり、ニューヨークから隣のニュージャージー州へ引越しました。車で50分ぐらいしか離れていませんが、そこは全くの別世界でした。今は、自然と生物多様性を守るため、ほとんど保護地区に指定されているところなんです。

家の前には広い森があり、そこは僕と友だちにとって遊び場であり、探検場でした。あちこちに秘密基地をつくったり、いたずらして大人に追いかけたら森の中に逃げ込んだり、木に守られている気持ちになりました。

森林についての考え方は、子ども時代の体験によってもものすごく左右されると思います。僕が日本で今ちょっとかわいそうだと思うのは、森を残して上手に維持管理しても、子どもたちがその森にあまり入らないことです。子どもにとって森は、理科の教室だけではなく、一つの大きな遊び場でなければならないと思うのです。子どもの頃から森と親しむことで、大人になっても森林保護の意識を持てるのではないのでしょうか。ですから、環境教育の大きなポイントは、とにかく子どもたちを森の中に入れることです。

## ■欧米では森に近い家ほど価値が高い

僕が生まれ育ったニューヨークの家は、プロスペクトパーク・ブルックリンという公園のすぐ近くにありました。公園は、この辺りの里山にあった風景をそのまま都市公園の中に残す、という原理で造られたものでした。

僕たち家族が田舎へ引越した後、叔母がその家で暮らし続けたのですが、60年代に治安が悪化し、地価が下がった時に叔母は安い金額で手放してしまいました。でも80年代にこの地区は甦り、建物自体が歴史的遺産、歴史的保存区に指定されました。今思う

ととても悔しい。価値が上がったこともありますが、大きな公園がすぐ近くにあるのが魅力でしたから。

僕がいつも驚くのは、日本の家や土地の価値は、駅に近い、買い物に近いなどの便利さで決まることです。欧米では、近くに自然があり、家から簡単に森に接触できるからこそ値段が高いのです。僕は今、近くに里山の自然があるところを選んで住んでいます。それを周りの日本人に説明しても、なかなか理解してくれません。みんなの関心は、駅やスーパーまでの距離など、生活環境に対しての価値観ばかりです。でも日本も少しずつ変わり、将来は、都市からさほど離れていないのに周りに立派な森がたくさんある場所が、高く評価されてくると思っています。

## ■日本は世界でも珍しい多様な自然に恵まれた国

僕はアメリカ陸軍の兵隊として、40年近く前に日本に派遣されました。今でも欧米の人たちは、日本に対して生産業のイメージを持っていると思いますが、その時の僕も同じ印象でした。でも、実際に日本に来て自然の豊かさにとっても驚きました。

2年間の兵役を終えたら国に帰るつもりでしたが、僕はまだ日本にいます。それは日本の自然に惹かれたからです。十分な雨量と温暖な気候の日本には木が成長する条件がそろい、しかも南北に長いため沿岸に暖流、寒流が流れ、とても多様な自然に恵まれています。世界を見ても、日本ほどの狭い国で多様な自然のある国はないと思います。40年日本に住んでいて、今も日本各地に出かけるたびに必ず新しい発見があり、学ぶことができます。

日本の森のタイプを全部リストアップすれば、50~60種類になると思います。交通機関が発達しているので、自然観察が好きな人なら日本は本当にもってこいの国だと思います。日本の森は世界的にも十分な魅力を持っているので、もっとアピールしてもいいと思っています。

## ■森は人間のために維持管理、保全しなければならない

僕の田舎には1時間ぐらい山に登ると森に囲まれた湖があり、素っ裸で泳いで出てきたら石の上で本を読む。それは、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの「ウォーキング」という本でした。この本の中に、彼が残してくれたすごくすきな言葉があります。英語で「In wildness is the preservation of the world」。160年ほど前、この言葉が欧米の自然保護運動の一つのキーワードにもなりました。「世界は野生のうちにこそ保たれている」という言葉で、僕はまさしくそのとおりだと思うんです。我々の現在の社会構造、日常生活の中で一番欠けているのは、野生との接触です。1年に1、2回ではなく、野生との接触が日常生活の一部でないとダメだと実感しているんです。そのために、「海上の森」のような身近にある里山的な森を維持管理して保全していく。これは生物多様性のためでもあるけれど、もしかしたらそれよりも、人間のために維持管理、保全しなければならないのではない、僕は深く思っております。



# パネルディスカッション

## テーマ 森林から考える 人と自然の共生

コーディネーター

川井 秀一  
(かわい しゅういち)

京都大学生存圏研究所所長  
NPO法人の木理事長  
専門領域:林産科学・木質工学



日本木材学会会長、日本材料学会副会長などを歴任し、林産科学、木質工学の分野で数々の業績を上げる。木材利用の普及、啓発活動にも積極的に取り組み、日本木材学会の「日本の森を育てる木づかい円卓会議」を前身とした「NPO法人の木の木」を立ち上げ、木づかい、森づくりの環境ネットワークづくりにも取り組む。

パネリスト

天野 正博  
(あまの まさひろ)

早稲田大学人間環境科学科 教授



1970年名古屋大学農学部林学科専修卒業。1972年名古屋大学大学院農学部研究科修士課程林学専攻修了後、独立行政法人森林総合研究所に勤務し、2003年4月から現職に就く。地球規模での森林の温暖化軽減機能に関する研究においては、森林が持つ大気中の炭素固定機能を京都議定書の観点から評価する手法を開発し、また、住民参加による熱帯林保全方策の研究においては、熱帯林の減少を推し進めている社会経済的要因を明らかにするとともに、流域の住民が参加した形で熱帯林保全方策を調査している。

川井:まず最初に、パネリストの先生方より話題提供をいただきたいと思います。

天野:京都議定書の温室効果ガスの削減の目標を達成するために、森林にCO<sub>2</sub>を吸収させることがとても大事です。炭素の塊である化石燃料は、一旦燃やして大気中に炭素を出してしまうと、それを戻すには莫大なコストがかかるのですが、森林は光合成の能力を使ってコストをかけないままCO<sub>2</sub>を一旦戻すことができます。コストのメリットだけでなく、その吸収能力にも期待がかかっています。生物学的な手法を取り入れれば、今後50年間で吸収できる炭素量は約1000億トン。毎年大気中に増加していく炭素は33億トンですから、森林には非常にたくさんのポテンシャルがあると言われています。

京都議定書の6%の削減目標に対して、私達は森林で3.8%を補おうと考えています。そのためには森林の復元はもちろんのこと、高齢級の森林の管理や生産・流通システムの確立、鉄やアルミをはじめとする原料の木材への代替え、森林バイオマスのエネルギーとしての利用促進などを提言しています。

川野:21世紀最初の万博は、自然の叡智から人間が謙虚に学ぶ姿勢を打ち出した点で、大変画期的でした。その背景には、日本人が持つ精神的遺産があると思います。

西洋ではギリシア哲学や旧約聖書により、自然は神の創

パネリスト

川勝 平太  
(かわかつ へいた)

静岡文化芸術大学 学長



1948年京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、早稲田大学大学院経済学研究所博士課程修了。オックスフォード大学哲学博士。早稲田大学教授国際日本文化研究センター教授を経て、2007年より静岡文化芸術大学学長に就任。教育再生会議、「美しい国づくり」企画会議、「食料の未来を描く戦略会議」等の委員を歴任し、現在、国土審議会、「構造変化と日本経済」専門調査会メンバーとして活動。さらに「子ども農山漁村交流プロジェクト全国推進協議会」会長、「ごはんを食べよう国民運動推進協議会」会長、「東京湾の環境をよくするために行動する会」会長を務める。「日本文明と近代西洋」「鎖国」再考」「富国徳論」「文明の海洋史観」「文化力・日本の底力」などの著書多数。

パネリスト

蔵治 光一郎  
(くらじ こういちろう)

東京大学愛知演習林 講師



1965年東京生まれ。東京大学農学部林学科卒業、同大学大学院博士課程修了。森林と水の関係を自然科学、人文・社会科学の両面から研究すると同時に、「森の健康診断」を愛知県矢作川水系の森林ボランティアらとともに創設。愛知自然環境団体、施設連絡協議会「あいち自然ネット」副会長を務める。著書は「緑のダム」「森の健康診断」「森林環境税は森を救えるか」「水をめぐるガバナンス」「水の革命」など。

パネリスト

小澤 紀美子  
(こざわ きみこ)

東京学芸大学 名誉教授  
東海大学人間環境学科 特任教授



1971年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了後、株式会社日立製作所システム開発研究所を経て現職に就任。工学博士、技術士。日本環境教育学会会長、子ども環境学会副会長、NPO法人子ども環境活動支援協会代表理事を務める。著書は「豊かな住生活を考える・住居学」「環境教育指導辞典」「まちは子どものワンダーランド・これからの環境学習」「まちワーク:地域と進める校庭&まちづくり総合学習」など。

造物で人はそれらを治めるために神の代わりとして創られたとされています。しかし日本では、山川草木悉皆成仏という思想にもとづき、人は輪廻転生を繰り返しながら動物にも植物にもなる、と考えられるようになりました。私の教えが働き、自然に対して謙虚になったと言われています。

日本は南北に長く、亜寒帯から亜熱帯まで全部あります。水の惑星・地球の豊かな生態系のすべてが集約されており、地球のミニチュアだと見立てることができます。今この愛知で自然の叡智に学んだことは、他の環境問題で悩む諸外国にとっても役立つはずです。この美しい星のモデルとしてのガーデン・アイランズ、庭のような国づくりを進め、世界に発信していきたいと思っています。

蔵治:日本では室町時代から森林資源の利用が増えはじめ、江戸時代には見渡す限りはげ山になったと言われています。明治初期が一番ひどく、愛知県は三大ハゲ山県のひとつに数えられていました。その後、植林によって森は回復したものの、今度は逆に見捨てられた人工林が問題視されるようになりました。放置された森は木が多過ぎて暗く、他の植物が生えません。災害に弱く、水質も悪くなるなどいろんな悪影響も出てきます。

私は矢作川や豊川、庄内川、長良川などの流域で森の健康診断を行いました。人工林の山中に生息する草花や落ち葉、土壌、混み具合、木の直径や樹林などを調査した



結果、6〜7割の人工林が不健康であることが明らかになりました。この問題を解決するためには、土地の所有制度の見直しが必要であり、もっと大切なことは、日本人が日本の木を好きになることです。国産米を選んで食べるのと同じように、日本の木に愛着を持って使うことが、人工林の健康維持につながっていくと思います。

**小澤:**私は地球環境問題と連動して、関係破壊というものが起きていていると思います。効率性重視の社会における分断化の問題や、他人あるいは自然との関わりを築く能力の低下などを感じます。また、子供たちは自然とのつきあい方が劣化してきたために五感なども衰退し、受験マシンになっているのではないのでしょうか。

私は環境教育の学会長を務めていますが、環境教育とは今日の様々な問題を教えることではありません。人と人、人と自然、人と文化・歴史、人と地球との関係性の再構築が求められている今、教育そのもののあり方を問うことではないのでしょうか。フィールドに出て現状を知り、そして過去に学び、今に学び、未来を学ぶことが必要になってくると思います。

それから、自然の中で自分たちの住むところを作ってきた私たちは、その過程で自然を破壊するのではなく育むという考え方をもち、行政と一緒に、縦割りではなく横断型で進めていくことが重要ではないかと思っています。そういった意味で、公と私の間のコモンの関係をどう築いていくかが、今とても問われているのではないかと考えています。

**川井:**天野先生にお聞きします。木材の炭素の蓄積を認めていくとは、具体的にどういう議論がなされているのですか。

**天野:**今のルールでは、森林を伐採したら炭素を排出したと計算されます。実際にはまだ大気中に戻っていない炭素が残り、その木材を使った人は炭素を吸収したことになります。蓄積された炭素はクレジットと呼ぶお金に換えられる権利となり、木材を買った人が得をします。しかし、木材を切り出して売った側からすれば、そのクレジットは自分のもの。輸出入で国家間のやりとりとなると意見に大きな隔たりができ、伐採木材の評価、つまりクレジットの割り当てについての議論が展開されています。

**川井:**川勝先生は、森林と人間はどのようにつきあい方べきだとお考えですか。

**川勝:**エジプト、メソポタミア、インダス、黄河の古代文明が栄えた地は、今は砂漠と化しています。世界の文明の歴史は森林を伐採する歴史だったと思うのですが、日本の場合、三内丸山遺跡では森を栽培していたと考えられています。奈良や平安時代には、生命の色の変化で春の訪れに気付いた唄が詠まれ、そんな昔の話でなくても、蔵治先生は水の味がお分かりになり、小澤先生は音で春を知るとおっしゃられました。私達は古くから森のつくり方を経験から学び、その中で五感を磨いてきたのです。これからは、その知識や感覚をお互いに共有し、地球の生態系の知識を豊かにしていく時代だと思っています。

**川井:**蔵治先生にも同じ質問をさせていただきます。

**蔵治:**過去の歴史を振り返ると、人間は食料を得るために、生きていくために木を切ってきました。そういう歴史を学ぶことはとても大切ですが、もう一つ、今の日本に多くの森林が残っている理由にも目を向けなければならないと思います。もし、今の日本の農地や水資源を使って食料を生産すると、人工の4分の1ぐらいにしか行き渡りません。農産物も水産物も自給率が低く、燃料も資源も膨大な量を海外から輸入しています。日本は生活に必要なものを海外から買える経済力があるから、森林を切らなくても済んでいるのです。そういうことにも関心を持って、森と人間のつきあい方を考えていかなければなりません。

**川井:**最後に小澤先生にお伺いします。環境教育は教える側にも相当の新しい試みや情熱が必要かと思いますが、どのようにお考えですか？

**小澤:**今の環境教育は総合的な学習時間と理科、社会で行われています。森林を学ぶには横のつながりがとても重要なのですが、縦割りで教えざるを得ないため知識が断片的になってしまいます。しかも、教えたからといって必ずしも知識が付くとは限りません。先生と生徒が一緒になって山の中に入ったり、ボランティアの方にもお手伝いいただき、柔軟に対応していくことが大切だと思います。人間の気づきを活性化していくことで、私達は叡智を働かせることができるのではないかと考えています。

**川井:**どうもありがとうございました。パネラーの方々から全く違った角度でいろいろなお考えを伺うことができました。自然を大切に、文化や生物や地域の人々、あるいは価値といった多様なものの共生を図っていくことが大変重要だと感じました。人と自然の共生は大変難しいことですが、その実現に向けて、そしてこのフォーラムからの世界への発信に向けて努力していきたいと思っています。





# ポスターセッション

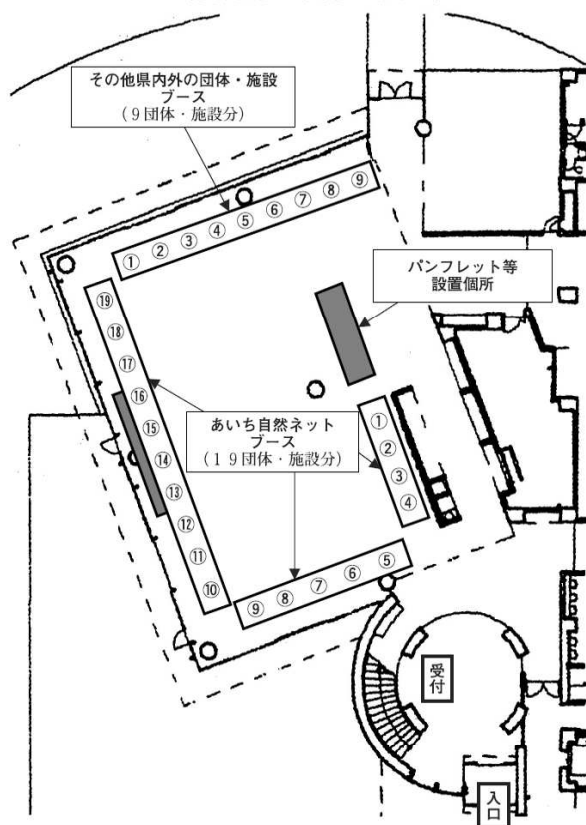
県内外の自然環境に関する活動を行っている28団体・施設が、県大食堂内に設置された各ブースにおいて、パネル展示や普段行っている活動内容等について説明を行い、参加者との活発な意見交換が行われました。

このポスターセッションでは、愛知県内で活動する団体・施設で組織されている「あいち自然環境団体・施設連絡協議会（あいち自然ネット）」が運営の中心的な役割を担い、活動団体・施設との情報交換や参加者との交流が積極的に図られ、県内における今後の市民活動の活性化に大きな期待が寄せられました。

## ブース出展団体・施設 一覧

ブース番号	団体・施設名
あいち自然環境団体・施設連絡協議会（あいち自然ネット）	
①	あいち自然環境団体・施設連絡協議会（あいち自然ネット）
②	NPO法人 環境市民
③	愛知県ネイチャーゲーム協会
④	ART & LIFE自然学校
⑤	海上の森野鳥の会
⑥	東京大学愛知演習林
⑦	海上の森の会
⑧	NPO法人 親水会
⑨	NPO法人 祖父江のホテルを守る会
⑩	日本カメ自然誌研究会
⑪	NPO法人 心豊かにARIDの会
⑫	NPO法人 渥美半島ハイキングクラブ
⑬	NPO法人 東海自然学園
⑭	エコミュージアムあいち
⑮	ネイチャークラブ東海
⑯	あいち海上の森センター
⑰	みどりのまちづくりグループ
⑱	尾張自然観察会
⑲	海上の森自然観察会
小 計	19団体・施設
その他県内外の団体・施設	
①	NPO法人 才の木
②	生物多様性条約第10回締約国会議支援実行委員会
③	もりの学舎（愛知県環境調査センター）
④	愛知県農林水産部農林基盤担当 森と緑づくり推進室
⑤	矢作川水系森林ボランティア協議会
⑥	トヨタ自動車株式会社（トヨタの森）
⑦	株式会社デンソー（エコレンジャー）
⑧	株式会社INAX（森でeことプログラム）
⑨	よりあい工房ばんどり
小 計	9団体・施設
計	28団体・施設

## ブース配置図 (愛知県立大学 食堂)





# フィールドワーク

フィールドワークには、総勢170名の参加があり、参加者は県内の各フィールドにおいて、熱心に説明者の話を聞き、森林や里山に対する理解を深めていました。

## プログラム①「海上の森 里山食文化体験と森の散策」

前日の基調講演で講師を務めたケビン氏やあいち海上の森センター名誉センター長のマリ氏らとともに、海上の里において収穫されたもち米を使った餅つきや、いも煮など炊き出しによる里山の食文化を体験した後、ケビン氏や「海上の森の会」の案内により、海上の森の動植物の説明を聞きながら森の散策をしました。



## プログラム②「県内森林・林業活動現地見学」(尾張地域コース・三河地域コース)

尾張・三河の2コースに分かれ、県内の森林・林業や里山に関する先進的な取り組みが行われている現地を見学しました。

### <尾張地域コース>

- ・東京大学愛知演習林 赤津研究林(瀬戸市)
- ・犬山里山学センター(犬山市)
- ・みろくの森(春日井市)

### <三河地域コース>

- ・トヨタの森(豊田市)
- ・列状間伐見本林(岡崎市)
- ・人工林間伐事業地(あいち森と緑づくり事業モデル林)(岡崎市)





## フォーラム宣言

基調講演やパネルディスカッションでの議論の結果を受け、講師の方々によりまとめられた「フォーラム宣言（案）」が、パネルディスカッションのコーディネーターである川井氏から提案され、参加者の大きな拍手により採択されました。

### 第2回人と自然の共生国際フォーラム フォーラム宣言（案）

- 私たちは、「第1回人と自然の共生国際フォーラム」において、世界各地に存在する「里山的なシステム」が人と自然の共生を図るうえで大切なことを学んだ。
- 今回、第2回フォーラムでは、里山を含めた森林が地球温暖化抑制や災害の防止、持続可能な社会づくり、文明の存続などの点において、大きな鍵を握っていることを認識した。
- 日本や世界の森林では、熱帯雨林の減少、開発による過度の伐採、手入れ放棄などが進行している。この現状に目を向けるとともに、私たちの身近な森林を見つめ直し、森林をどのように守り、利用していくかを議論した結果、以下の宣言を行う。
  - ①地球温暖化の防止、生物多様性の確保、水資源のかん養、災害の防止など多様な森林の働きを、改めて科学的に正しく理解するよう努めること。
  - ②森林の働きについて、子どもたちを始め広く多くの人へ理解の輪を広げていこう、森林を舞台とした活動や学習を推進すること。
  - ③森林を持続的に守り、利用していくため、自発的で自立した地域づくりと一体となって森林整備を進めるとともに、NPO・企業・学校など多様な主体の積極的な参加を促すこと。また、国産木材の選択的利用を推進し、木質資源の持続可能で循環的な利用を確保すること。
  - ④今後、これらのことをまわりの人たちに始め世界に広く発信し、自らも具体的な行動を起こしていくことを約束する。

平成20年11月15日 人と自然の共生国際フォーラム参加者一同

## 閉会の言葉

伊藤 義英（愛知県農林水産部農林基盤担当愛知県技監）